

「長崎派遣事業に参加して」

豊島区立西池袋中学校 2年 濱田 結実

私の曾祖母は長崎原爆の被爆者です。しかし、直接話を聞けないまま亡くなってしまったので、もっと話を聞いてみたいと考えており、今回本事業に参加を希望しました。

実際に被爆者である今道さんに貴重なお話を伺い、当時の苦しさや未来への強い意志を感じました。原爆が爆発した当日、朝から空襲警報が鳴り、今道さんは防空壕に避難し母を待ちながら泣き叫んだそうです。数日後、長崎から40kmはなれた疎開場所に避難した時に「初めてご飯をお腹いっぱい食べることができて夢のようだった、帰りたくなかった。」というお話も、とても胸が痛みました。また、「被爆者と結婚すると障害のある子供が生まれる。」という噂が広まったというお話が強く印象に残り、残酷な気持ちに包まれました。



今道さんは「一人一人が小さなことでもいいから平和を探してほしい。それが大きな平和につながる。」とおっしゃっていました。お話を伺って改めて原爆や戦争の怖さを知ることができ、平和の大切さを知ることができました。

実際の式典には日本だけではなく、世界中から多くの方が参列していました。長崎市長の長崎平和宣言「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」という言葉が今でも忘れられません。また、被爆者代表の「平和への誓い」のなかには耳をそむけたくない話もありましたが、誓いの最後に「皆さん、この美しい地球を守りましょう。」という言葉に強く胸を打たれました。資料館では原爆についての詳しい説明や原爆当時の形が変形したガラスの瓶や溶けた小銭などが展示されており、自分の目で原爆の恐ろしさを感じることができました。

私は長崎派遣事業を通して、改めて原爆の悲惨さや恐ろしさを感じることができました。そして、私たちには平和を守る責任があると考えました。これからも平和について考え、伝えていきたいと思います。



中学生報告書

「後世に伝える」

豊島区立西池袋中学校 2年 山本 ゆず

私は、テレビやインターネットを通して戦争や原爆についての番組を見るうちに関心をもつようになり、被爆から80年という節目の年に、実際に長崎の地を訪れて自分の目でその今の姿を確かめたいと思うとともに、原爆がもたらした被害や、そこから立ち上がった人々の思いを、画面越しではなく自分自身の五感で感じ、より深く学びたいと考え、この派遣事業に参加しました。

特に印象に残っているのは、原爆資料館を見学した時のことです。被爆当時の写真や遺品が数多く展示されており、原爆が一瞬で人々の命や暮らしを奪った現実を目の当たりにしました。焼け焦げた学生服や止まったままの時計を見たときには、言葉を失い、「こんな悲惨なことが本当にあったのか」と胸が締めつけられる思いでした。写真や映像だけでは想像できない、その時代の空気や人々の苦しみがそこには確かにありました。

また、実際に被爆を経験された方から直接お話を聞く機会もありました。その方は、大切な人を失った悲しみや戦後の食糧難など、自らの体験を静かに、けれど力強く語ってくださいました。その数々の出来事を聞きながら、私は自然と『平和とは何か』という問いを自分に投げかけました。戦争は命や暮らしを奪うだけでなく、人々の希望や尊厳さえも奪ってしまうことを改めて知り、平和の尊さを深く考えることになりました。

戦後80年の節目の年に行われた平和祈念式典では、多くの人たちとともに黙祷を捧げ、長崎市長の平和宣言を聞きました。「核兵器のない世界を目指す」という強い意志が伝わり、私も平和のために自分にできることは何かを改めて考えるきっかけとなりました。

今回の派遣事業を通して、平和は決して当たり前のものではなく、戦争や被爆を経験した多くの人たちの想いや努力によって守られてきたものだ実感しました。だからこそ、ぜひ皆さん一人ひとりが考えてほしいのです——平和とは何ですか。

最後の被爆地長崎に行って

豊島区立千登世橋中学校 2年 小松野 佑太

1945年8月9日11時2分、原爆が約7万4000の命を一瞬で奪いました。爆風、熱線、放射能の3つが長崎を襲いました。また、原爆が投下されたあとも、後遺症が残ったり、被爆者として差別されたりもしました。そのような戦争の悲惨さを知り、自分たちがそれぞれ平和な世界を切り開く一員だということがはっきりとわかりました。

またこの長崎の派遣で得たことがあります。以前私は家族旅行で長崎に行き、原爆資料館を見ました。その時も戦争の辛さが伝わりました。しかし、この豊島区の派遣事業と家族旅行の決定的な違いは、同じ区に住む同級生と学び合えることです。同級生と行くといいことは二つあり、一つは意見が言いやすいことです。親しい仲になるにつれ、戦争の辛さや悲惨さを語り、自分の意見を相手に共有することで同じ意見を持ち、平和な世界を目指す仲間がいるという自信もつきます。もう一つは同じ体験をしているということです。同じ体験をしてももつ感想やメモなどは全く違います。それを時間があるときに見せ合って自分のメモに書き足すことによって思い出したりもできます。実際にメモを見せてもらい、自分のメモにも書き足しました。

このように同級生で、同じ目的で同じ体験をし、意見を言い合える事業は他にないと思います。そして得た経験や感想を学校で伝えると、皆が平和についてもっと知ってもらえると思います。みんなが平和について知ると、平和な社会の実現に一步でも近づけるのではないのでしょうか。長崎を最後の被爆地にして欲しい。こんな悲惨なことを繰り返してほしくないという被爆者の強い願いを私達は叶えたいです。そのためには平和についてもっと知ってもらうために、また自分が平和な世界を実現する一員だと知ってもらうためにも私はこの長崎派遣事業は続けるべきだと思います。

中学生報告書

ノー・モア・ヒバクシャ 未来に受け継ぐ平和の誓い

豊島区立千登世橋中学校 2年 富山 蓮凰

今年2025年は被爆、終戦80年という節目の年であり、色々なところで「戦争」「平和」「原爆」といったことを多く聞く。そんな中で長崎派遣事業を耳にして自身の見聞を深め、得た学びを今後の生活に活かしたいと思い参加を決意した。

長崎に行き、被爆者の方のお話を聞いたり、原爆資料館を見学したりする中で「平和」への考えがより深くなっていった。どうすればこの世界は「平和」になるのか、そもそも「平和」とはなんなのか。もちろん「平和」とは具体的な一つの正解があるものではないだろう。だからこそ、一人一人が「平和」を考えていくことが大切なのではないか。

今回の長崎派遣事業の行程で長崎平和祈念式典に参列した。その中の長崎市長、鈴木史郎さんの長崎平和宣言が深く印象に残っている。全文紹介したいところだが、今回は特に印象的だった2箇所に絞ろうと思う。一つは冒頭の『「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください』の所だ。戦争が戦争を呼ぶ悪循環を断ち切る。そのためには武力行使を辞めなければならないのだ。もう一つは「ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ、ノー・モア・ウォー、ノー・モア・ヒバクシャ」だ。ここの一節を読み上げる時に、鈴木市長は手元から目を離し、世界の指導者達に訴えかけるかのような強い口調で声を張っていた。それはさながら被爆者の魂の叫びのように感じた。

やはり、戦争は繰り返してはいけない。長崎で学習をして深く心に誓った。原爆投下後数十年は緑が育たないといわれ、原爆で見るも無惨になってしまった街並みを今の姿に戻した先人達の血の滲むような努力。それに敬意を示し、次は私たちが努力する番だ。戦争から80年経ち、戦争を知っている人も少なくなっている。だからこそ私たちが戦争を知り、それを後世に語り継ぐ、恒久的な平和に向かって努力する。それが戦争で亡くなった方へ私たちができる最大の追悼だろう。

中学生報告書

「普通の生活とは」

豊島区立千川中学校 2年 伊藤 桜子

私は、幼い頃から、「この世界から戦争をなくしたい」と思っていました。しかし、それは漠然とした思いで、実際にどのような活動をすればいいのか分かりませんでした。そんな時、「長崎県で原爆の事について学ぶことができる」という貴重な機会を頂き、参加することを決めました。

私の心に強く響いたのは、被爆した方の講話です。その方が、特に強調して話していたのは、「被爆後の生活」についてです。被爆したほとんどの方は、即死してしまっています。だからこそ、「生き残れたからいい」と感じてしまうと思います。しかし、生き残ることができたとしても、決して幸せで、順風満帆な人生だとは言えないそうです。被爆の際に負った怪我や放射線による後遺症に苦しめられ、病院で寝たきりの生活が続いたそうです。被爆した方が、日に日に体調を崩していき、亡くなってしまう、ということは数え切れない程たくさんあった、とおっしゃっていました。中には、麻酔が無くなってしまい、麻酔なしで手術に臨んだという方もいらっしゃいました。やっとの思いで退院できたとしても、家族や知り合いが生きているとは限りませんでした。「被爆者」というレッテルを貼られ、就職や結婚も容易ではなかったそうです。これ程、過酷で苦しい出来事の連続でも、「亡くなってしまった方たちの分まで精一杯生きよう」と、今日まで語り手の活動を続けていらっしゃるそうです。

私が長崎派遣事業に参加する以前は、「学校に行き、友達と他愛もない会話をする」ということは何の変哲もない、「普通の生活」でした。しかし、長崎派遣事業に参加したことで、私の中の「普通の生活」は、「この上なく恵まれた、幸せな生活」なのだと実感しました。もう二度と、このような悲劇が繰り返されないために、今度は私たちが、一人でも多くの方に語り継ぎ、先人達に恥じぬよう、精一杯生きていきます。

中学生報告書

「長崎派遣事業を終えて」

豊島区立千川中学校 2年 中村 円

私は幼い頃から戦争について関心がありました。しかし、長崎派遣事業に参加する前の私は長崎原爆について「長崎に1945年8月9日に原爆が落ちた。」という事実しか知りませんでした。だからこそ、この機会では長崎では当時どのようなことが起きていたのか知りたいと思い、参加を希望しました。

私が心に強く残っているのは被爆した方による講話です。特に驚いたのは、被爆者の方は長年に及び周囲から冷たく扱われたということです。放射線による病気は伝染病だと罵られ、被爆者との間に生まれた子供は障害もちだと言われたそうです。私はその話を聞いた時、胸がとても痛みました。「辛いのは被爆したときだけではない、被爆したあとも辛いのだ。」と知りました。

また、当時はお腹が空くことが一番辛かったといいます。被爆したあとに自分達のことをかくまってくれる農家さんの家で、初めてたまごかけご飯を口に、人生で初めてお腹いっぱいになることができました。私はそれを聞いて、好き嫌いで食べるものを選んでいられることは恵まれたことなのだと感じました。

戦後80年である今年に長崎を訪れ、平和祈念式典にも参列することができ、身の引き締まる思いでした。未だに戦争を続けていたり、核兵器を製造していたりする国が存在することが私は悲しくて仕方がありません。誰も笑顔にならない、誰も幸せにならない醜い争いはもうやめてほしいと強く願います。今こうして生きている間にも被爆体験をした人がいなくなってしまう世界は近づいてきています。だからこそ、私は今回学んだ事実を多くの人に語り継いでいきたいと思えます。

最後に被爆者の方は「自分にできる小さな幸せは集まって大きな幸せになる」とおっしゃっていました。自分にできる小さな幸せとはなんだろうと東京に帰ってくる時ずっと考えていました。当たり前前に学校に行き、授業を受け、友達と笑い合い、手を取り助け合う。でもたまには喧嘩をしたり、叱られたりする。そんな日常が私の考える小さな幸せです。

平和へのスタートライン

豊島区立明豊中学校 2年 友田 蓮希

1.長崎派遣事業を知る前

私は広島出身であるため、昔から原爆の事を親から話を聞いていました。平和祈念式典があることを知っており、当時の出来事についてもいくらか知識があると思っていました。ただ、それは広島で起きたことに限っているうえ、細かいところまでは理解していなかったため、この派遣事業に参加することにしました。

2.実際に平和祈念式典に参列

実際に平和祈念式典に参列してみて、実感したことがあります。それは、会場に来ている人数の多さです。予想していた人数を遥かに上回っており、外国の人も参列していたことに驚きました。ほかに、現在では想像もつかない原爆という爆弾が多くの人々の命を奪い、考えたくもない光景が当時は広がっていたという事実があったということです。

そして、なに不自由なく平和に暮らせている自分の状況がいかに奇跡なのかを再認識させてくれました。この奇跡に日頃から感謝し、これからの世界の平和のために行動するとともに、平和が続くことを祈るばかりです。

3.長崎原爆資料館

長崎原爆資料館に行き、当時の写真やそこにあった物を見てきました。資料館に展示してあった物の中に、人々が日常で使っていたお皿や衣類があり、それを見たとき当時の家族の暮らしを想像して胸が痛くなりました。そして当時の人たちの写真を見ました。笑顔溢れる子供たちの写真や幸せそうな写真もありましたが、その写真の様子とは正反対に、残酷な写真もいくつもあり、何もしていない大人や子供達が巻き込まれ、無慈悲にも原爆の影響により亡くなった方がいると考えたら原爆の恐ろしさが心に刻まれました。

4.派遣事業で学んだこと

長崎の派遣事業に行き、学んだ事が多くありました。原爆は人々の命、その土地にあった歴史を全て消し去り、多くの人々の心に決して修復することのできない深い傷を負わせた、人類が手にしてはあまりにも危険すぎる兵器だと思いました。そして、未来永劫このような悲劇が繰り返さないようにする為にも現場に行った僕らが学校の生徒へはもちろん、それ以外にも沢山の人のこの事実を伝える為に努力していきます。

中学生報告書

80 年前の惨劇

豊島区立明豊中学校 2 年 川内 慎司

1. はじめに

自分が長崎派遣事業に参加をして学んだことは「核兵器を無くすことの重要性」と「戦争の恐ろしさ」という二つのことです。

2. 語り部「今道 忍さん」のお話

長崎では、実際に被爆して今は語り部をしている今道忍（いまみちしのぶ）さんから当時の状況のお話を聞きました。そのなかで、特に印象に残っていることは戦争中に一番怖かったことが「飢餓」ということです。自分は、お話を聞くまでは空襲など直接的に被害を受けることが 1 番怖いと思っていました。しかし、今道さんのお話を聞いて当時の状況について考えを改めることができました。

3. 長崎原爆資料館の見学

想像することができないような写真や被爆して悲惨な姿になってしまったものがありました。今思い出すだけでも怖く、「戦争の悲惨さ」を物語っていると感じました。そして、世界では今でも核実験が行われていたことを知り、もう広島や長崎のような惨劇を目の当たりにしてはいけないと強く思いました。

4. 長崎平和祈念式典への参列

11 時 2 分には、1 分間の黙祷があり平和の鐘とともに被爆者の方々へ哀悼の意を表しました。自分は「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」という長崎平和宣言の一部が当時の人たちの思いや苦しみを物語っていると感じ今でもこの言葉が深く心に残っています。

5. まとめ

2 日間で、想像以上に沢山のことを学びいろいろなことを考えました。そして、「平和」とはいつも通りの生活を送れることだと思います。今後の生活では、自分たちがこれからの日本を背負っていくという自覚をもち生活をしていきたいと考えています。

最後になりましたが、豊島区教育委員会の職員の皆さまを始め、今道忍さんや長崎平和ガイドの皆様など、本事業でお世話になった皆様に心より感謝申し上げます。